貨幣の功用と影

社会主義の歴史的実験が７０年で崩壊した後、世界は、新自由主義や市場原理主義の牽引するところとなってきた。しかしその覇権も３０年にして破綻し、全世界に災厄をもたらすに至り、これらの原理もまた今後採用してはならないことが明らかになった。けれどもかれらは、鳴りを潜めているものの、いまも巨大な潜在力をもっている。

社会主義は終焉したのであるが、資本主義は無くなっていない。私有財産、貨幣経済、資本は無くならない。金融資本も無くすことはできないと思われる。

人類は原初以来家族単位で財産を保持してきたのであり、私的所有は人間本来の姿と考えられる。金貸しもすでに古代に、利息に関する言及がなされるなどその歴史は長い。

また、人間が、他との交流、物的、精神的交換によって存在しているものであるかぎり、媒介形式が必要となる。媒介の緩衝装置があることによって人と人との関係が、直接支配ではなく、スムースに行われる。この点、貨幣は、同じ媒介手段である言語と同様に、人間社会にとって血液となっている。

また貨幣は、数学でもあり、論理的かつ非人格、抽象に貫かれているため、媒介形式として無限の可能性をもつ。人類の生活向上や文化の達成は貨幣経済がなければできなかったことだろう。

つまり、これらのシステムは永続的なものと考えられる。問題は、現代社会では貨幣やその他の媒介形式が全生活を覆いつくすところにある。

すべて本来手段であった技術が、その達成度が大きく高いとき、生活全体の重要性と混同されることが避けられないといわれる。手段は、大規模となり、より純化され、より賞賛される。手段の完成が全生活の達成と同一視される。すなわち手段の目的化である。反面それはまた人間性からの離脱ともなる。

金融工学の寵児であったホリエモンが著作『徹底抗戦』を刊行しているが、彼の生活世界は、ひたすら金の力による覇権を目ざしているだけで、身内や友人とのつながりが見られず、読書もせず自然や芸術を愛でることもない。荒涼孤独であったと読みとれた。

古来、宗教、哲学、文芸において、貨幣への狂奔が人格喪失を招くことについて、幾多、警鐘が鳴らされてきた。

しかし、手段自体は悪なのではない。人間の用い方によって悪が生ずる。手段である資本を暴走させたことが、諸個人を貧困にするだけでなく、社会の靭帯をずたずたにすることを目の当たりにした今、手段の使用方法を変えることが必須であり、かつて修正資本主義、社会民主主義が広く提唱されていたことも想い出したい。

過般の殺伐とした新自由主義の潮流の中でも会員の皆様方は一貫して社会寄与に心がけてこられました。恐慌ともいうべきいまの不況下においても、当センターに対し変わらず浄財をお寄せくださっていることにつきまして、深く感謝申し上げるとともに、皆様の御見識に敬意を表する次第です。

（2009.5.25 社団法人 くらしのリサーチセンター 総会あいさつ）